

令和8年産 特別栽培米つや姫・雲南市プレミアムつや姫 栽培暦

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																			
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25															
日						育苗					活着					有効分けつ					無効分けつ					幼穂形成					穂ばらみ					登					熟				
生育段階・区分	播種					田植え					有効分けつ決定期					穂首分化期					最高分けつ期					類花分化期					減数分裂期					出穂期					成熟期				
	<p>出穂期が8月上旬～中旬となるように播種・田植えを実施する。</p>																																												
技術内容	<p>・ 深耕は、一五〜一八cmを目安に行う ・ 耕起作業は、均平が図れるように行う</p> <p>◎健康な苗づくりを！（苗半作！）</p> <p>・ できるだけ外気温にならして健苗育成 ・ 硬化期は温度管理に注意しながら ・ 薄まきの励行（乾籾一〇〇g（箱）程度）</p> <p>◎基肥は控えめに！</p> <p>◎植え付けは適正に！</p> <p>・ 有機物多用田では減肥</p> <p>◎水管理の徹底！</p> <p>・ 体系処理による効果的除草</p> <p>・ 中干し開始一八〜二〇本/株 ・ 作溝の実施（極端な中干しは行わない）</p> <p>◎中間追肥の施用</p> <p>・ 粒状肥料体系・ペースト肥料体系</p> <p>◎葉色・茎数を確認し生育に応じた施用を実施する 有機質肥料は緩効性のため出穂前二五日を目途とする</p> <p>◎穂肥は適期に適量を！</p> <p>◎カメムシ防除の徹底！</p> <p>・ 仕上げは万全に！</p> <p>◎稲わら腐熟・土づくり肥料・堆肥等） 土づくりの実施</p> <p>◎網目一・九〇使用厳守！</p> <p>・ 選別流量を適正に！</p> <p>◎適正な乾燥へ急激な乾燥は避けゆっくりと</p> <p>・ 青味籾率一〇〜一五%</p> <p>◎適期刈り取り</p> <p>・ 適期落水に努め早期落水はしない！</p> <p>◎出穂後三〇日程度は間断かん水</p> <p>◎低温の時は深水管理</p> <p>◎稲いもち防除・カメムシ防除</p> <p>一発施肥の場合、幼穂形成期頃に葉色が淡くなる場合は、追肥を行う（葉色板で3.5以下）（窒素量で1kg）</p>																																												

◆栽培での注意事項

栽培資格 栽培要件	JASまねの定める特別栽培米基準に基づき、適切な栽培管理を実施し栽培の記録を行う。
栽培目標	土づくりを基本とし、健苗育成・適正防除・施肥・水管理等を徹底する。また、収量を第一とせず、品質（整粒歩合）・食味の向上に重点を置く。
土づくり	稲わらを腐熟させるために秋起こしを実施する。地力増進を図るため完熟堆肥等を施用し、品質、食味向上、収量改善のため、土づくり肥料（推奨品目：田んぼの守60kg/10a）を施用し、稲体の健全化を図る。また、深耕は15〜18cmを目安とする。
施肥	肥料は暦に基づき有機態窒素入り肥料を施用し、 施肥量は化学肥料の窒素成分で10a当り4.0kg以下 （慣行栽培の5割以下）とする。
育苗・田植	特別栽培米の種籾は、無消毒種子の温湯消毒種子または、微生物農薬による消毒種子を用いる。健苗育成を行うため薄播き（乾籾120g程度）とし、1株当り3〜4本植えとする。出穂期の高湿・登熟障害対策として、 出穂の目安を8月上旬～中旬におき、播種は5月1日以降、田植時期は5月下旬となるよう育苗を行う。
水管理	過繁茂を防止し稲体の健全化を促すため、間断灌水や中干し等、基本管理を徹底する。なお、 登熟期間（生育後半）での根の活力を維持させるため、極端な中干しを行わないようにする。 また、品質向上（ 整粒歩合 ）を図るため 出穂後30日頃まで間断灌水 を行い、早期の完全落水をしない。
病害虫防除	畦畔の草刈り等を徹底し、病害虫防除に努める。農薬を使用する場合は、種子消毒、防除剤を含め、栽培暦に基づき薬剤を使用する。なお、指定薬剤以外の薬剤防除が必要な状況が生じた場合は、関係者が協議し、追加防除を行った圃場の米は慣行栽培米の扱いとする。

◆施肥基準(10a当り)

粒状肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 成分量(kg)					
			-25日	-10日	窒素	リン酸		
完熟堆肥(※1)								
田んぼの守(※2)	60				1.8	1.8	2.6	
優作	23				2.3 「1.13」	2.0	2.0	
ホスピタ(※3)		20				1.0	2.3	
けい酸加里 プレミア34(※4)		20					4.0	0.8
優作(※5)			15		1.5 「0.74」	2.5	2.5	
化成肥料 17-0-17(※6)				10	1.7 「1.7」		1.7	
合計					5.5 「3.57」	7.3	12.0	5.7

ペースト肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 成分量(kg)					
			-25日	-10日	窒素	リン酸		
完熟堆肥(※1)								
田んぼの守(※2)	60				1.8	1.8	2.6	
プレーバーペースト 734	35				2.45 「1.23」	1.1	1.4	
ホスピタ(※3)		20				1.0	2.3	
けい酸加里 プレミア34(※4)		20					4.0	0.8
優作(※5)			13		1.3 「0.64」	2.0	2.0	
化成肥料 17-0-17(※6)				10	1.7 「1.7」		1.7	
合計					5.45 「3.57」	5.9	10.9	5.7

一発肥料体系

「」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 成分量(kg)					
			-18日	窒素	リン酸	加里		
完熟堆肥(※1)								
田んぼの守(※2)	60				1.8	1.8	2.6	
ホスピタ(※3)	40					2.0	4.6	
けい酸加里 プレミア34(※4)	40						8.0	1.6
新つや姫用一発 肥料(※7)	36				4.3 「2.15」	2.2	2.2	
化成肥料 17-0-17(※6)		8			1.36 「1.36」		1.0	
合計					5.66 「3.51」	6.0	13.0	8.8

- 注 意 事 項
- ※1: 完熟堆肥は、作土の肥沃度判定表により決定（低:1トン、中〜高:0.5トン〜1トン、極高:0〜0.5トンを目安。※黒ボク土の場合は、低:1トン、中:0.5トン〜1トン、高:0トン〜0.5トンを目安）
また、肥沃度が「極高」の場合は、窒素量で1kg程度減肥する（黒ボク土の場合で肥沃度が「高」の場合は、窒素量で1kg程度減肥する）
 - ※2: 推奨品目「田んぼの守」以外では、「ミネラルG(200kg/10a)」「ミネガード(100kg/10a)」「ミネリッチ(100kg/10a)」等の施用（施用量は基準）
 - ※3: ホスピタは、収量の増、食味向上に向け基肥または中間追肥としてホスピタを20kg〜40kg散布を行う（生育状況等により施用、無施用を判断する）
 - ※4: けい酸加里プレミア34は、粒状・ペースト肥料体系は田植え後30〜35日頃に施用、一発肥料体系は基肥施用する。
 - ※5: 穂肥(優作)は、出穂25日前頃に葉色、茎数を確認し施用する(窒素施肥量で1.3〜1.5kg)
 - ※6: 化成肥料17-0-17は、生育後半の肥料切れを抑えるため、葉色を確認し施用する(窒素施肥量で1.0〜1.7kg)。但し、化成肥料由来の窒素量を超過しないようにする。
 - ※7: 新つや姫用一発肥料は、初期の肥効が緩やかなため、山間地域等の初期の分けつが確保しにくい水田では、極端な疎植をしない。

◆農薬使用基準(成分回数8回以内)

注1)〇内の数字は成分回数を表します。
注2)農薬使用基準を正しく守りましょう。

種子消毒剤	特別栽培米の種籾は、無消毒種子の温湯消毒種子または、微生物農薬による消毒種子を用いる。	
育苗箱施薬	稲名人箱粒剤②	
除 草 剤	初期期	先陣ジャンボ②又は先陣1キロ粒剤②又は先陣200FG②
	初中期	オイカゼZジャンボ②又はオイカゼZ1キロ粒剤②又はオイカゼZ250FG②
本 田 防 除	出穂期	〈カメムシ・ウンカ類〉 キラップフロアブル①又はキラップ粉剤① } 収穫14日
	穂ぞろい期	〈カメムシ・ウンカ類〉 スタークル液剤10①又はスタークル粉剤DL①又はスタークル豆つぶ①又はスタークル粒剤① } 収穫7日 前まで
*の薬剤は 農薬成分回数 の 対 象 外	混用例	〈いもち病 カメムシ・ウンカ類〉 *カスミン液剤× キラップフロアブル①又はスタークル液剤10①
	混用例	〈紋枯病 カメムシ・ウンカ類〉 *バリダシン液剤5× キラップフロアブル①又はスタークル液剤10①
		〈いもち病 紋枯病 カメムシ・ウンカ類〉 *カスミンバリダシン液剤× キラップフロアブル①又はスタークル液剤10①
		〈稲こうじ病〉*ドイツボルドーA